

2年1組

ぼうけんしよう、はっけんしよう ～ものを、たのしさを、くらしをつくる～



一組の生活科は、「べっそうでの遊び」と「モルモットの飼育」、そして「作物の栽培とお菓子作り」の三つの柱があり、どれも楽しんできました。そこで、三つの活動について、それぞれお伝えします。

どうして手作りだとおいしいの？

第一弾のさつまいもチップス作りでは、初めて使うスライサーに苦戦しながらも塩やコンソメ味を効かせたさつまいもチップスに大満足することができました。去年は新型コロナの影響で調理活動ができませんでしたが、今年はピザ作り・お団子作り、そしてさつまいもおかし作りに取り組むことができました。さつまいもチップスを食べながら、「ピザの時もそうだったけど、どうして手作りだとお店よりもおいしいんだろう」とAさんはつぶやいていました。「がんばって作ったからおいしくなるのかな」と私が言うと、「レンガ作りの時もがんばったけど、やっぱりがんばるって大事なんだね」と話していました。さつまいもを揚げながら、昨年Rさんが言った『がんばったレンガじゃないとダメだよ』の言葉が思い浮かびました。

自分の手や体を使って作ったり育てたりする経験は子どもたちにとってかけがえのない経験となり、その感触や感覚は大きくなっても忘れず活かされると思います。できるだけ体験的な学びを子どもたちとしていきたいと思っています。また、栽培や調理を通して食べ物や作ってくれる人への感謝の気持ち、食品・食材を無駄にせず使い切ることの大切さを小さい頃から学んでいけるといいなと思います。

2月28日、今年度最後のさつまいもを使ったおかし作りをしました。これまでのおかし作りでも怪我をせず安全に作るということが一番大切にしてきました。今回のお菓子作りでは、保護者のお手伝いを断ってまで「自分たちだけ作りたい」という気持ちがありました。そして、誰も保健室にお世話になることなく、安全に楽しく美味しいお菓子を作ることができ、お家の方へプレゼントしました。たとえ美味しいお菓子ができても、怪我をしてしまったりは十分に楽しめないということ子ども達は感じており、怪我なくできてこそ心から楽しめることをわかっていたのでしょう。

モルモットのこと、大好きになったよ

「動物を飼いたい」という願いを持って始まった二年生。たくさん考えて話し合っ「動物を飼う」ことを決めました。クラスにモルモットを迎え、子どもたちのくらしはより豊かになったように感じます。自分のことよりも動物のことを最優先に考える子どもたち。言葉が通じない分、様子や排泄物から健康状態や感情を感じ取っていました。動物飼育を通して以前にも増して友だちと知恵や力を合わせる姿がありました。「動物を飼ったら、他のこともがんばれそう」と語ったRさんの言葉が忘れられません。Rさんの言葉のように、動物飼育に限らず何事にも全力に挑戦した一年間でした。一組のモルモット3匹の中でも特に寒さに弱いココロ。少しでも寒さから守れるよう、春にお手伝いをして貯金した2810円を使ってペットヒーターを買いました。また、少しでもココロが自由に動けるように柵の扉を開けスロープをつけて出入りできるようにしました。ココロは楽しそうにトコトコと出かけたり、部屋でくつろいだりするようになりました。ココロのストレスが和らいだのか、それから大きく体調を崩すことがなくなりました。モルモットの幸せは私たちの幸せにもなりました。このココロに特に心を寄せているのがTさんです。後期の終業式の発表でTさんは、「モル



モットが来てくれたから学校がもっとすきになりました。モルモットをだっこしたり、お外でおさんぽしたりしました。三年生もモルちゃんとかんばっていきたいです。さいしょはモルモットがどういうものかわからなくてふあんだっただけれど、なかよくなれたしかわいくて大すきになりました」と、話しました。Tさんは休みの日にもよくモルモットを預かってお世話をしていました。モルモットへの気持ちがいっぱい込められた作文をぜひ終業式で発表してはどうかと私がTさんに提案した時、Tさんはすごく戸惑っていました。それでもTさんは翌日「やってみようかな」と言いました。モルモットと過ごしてきた日々の中で、Tさんは一回りも二回りも成長したように感じます。この日の発表する姿にTさんの「ひとりだち」を感じずにはいられません。三年生でもいろんなことに挑戦していけるのではないかと思います。「好き」の力は大きなエネルギーになることを感じた一年でもありました。



高さに挑戦するっておもしろい

1組のべっそうの壁の高さはどのくらいあると思いますか。一番高い4班の壁は84cm ありました。測ってみると1・2班は72cm、3班は 74cm、5・6班は56cm でした。一から作った手作りレンガの壁なので、この壁に乗ったり跨いだりすることはしません。しかし、目の前に越えられそうな壁があったら飛び越えてみたくありませんか。子どもたちはよく我慢してきたと思います。それはみんなにとってべっそうが特別な場所であることを物語っている証でもあります。

そんな子どもたちの気持ちを感じながらも私は、段々と高く積まれるレンガの壁を見て、体育の走跳の運動あそびに取り入れたいなと思っていました。夏休み明けから集めていた牛乳パックはこの教具に使うためのものでもありました。レンガの代わりに牛乳パックの壁であればぶつかっても壊れても怒ったり悲しんだりしません。そこで、みんなでガムテープを使って一段20個の牛乳パックを貼り合わせていきました。全部の段を重ねると子どもたちの身長ほどの壁になりました。これを子どもたちが挑戦しやすそうな3つの高さに分けました。

いよいよ体育館に運び入れる日がやってきました。100~200個の牛乳パックでできた壁は一人や二人では運べません。みんなで声を出し、息を合わせながら「エッサ ホイサ」と運んでいきます。この道のりがワクワク感を高めているようでした。

ケンステップやミニハードルで体を温めた後、いよいよ壁に挑戦する時がやってきました。初めにHさんが跳んでみると見事に一番高い74cm の壁を飛び越しました。隣で見ていたYさんは「とんだ!とんだ!とんだ!」と驚きながらHさんの元へ駆け寄って行きました。友だちが飛び越えると拍手や歓声が起こり、飛び越えられないと「惜しい」「大丈夫」と励ましの声が送られていました。「跳べなさそうだけど、やってみよう。でも怖い」とドキドキとワクワクが入り混じっているようでした。回を重ねる中、Yさんは直線的な助走から曲線的な助走へと変化していきました。このYさんの影響を受けたのがFさんでした。Fさんは曲線的な助走に加え大股で加速する助走が自分に合っていることを掴んでいきました。

このFさんの様子に影響を受けたのがAさんでした。Aさんは大股で助走する事で自分に合った踏み切りができるようになっていきました。「74cm の壁を飛び越えたい」という願いを持ち「どうしたら飛び越えられるかな」と問いを持って挑戦し続けた子どもたち。一人一人の体に合った助走や跳び方を見つけていきました。また、YさんからFさんへ、FさんからAさんへ、YさんからAさんへというように見つけたコツが連鎖し自分のものとなっていきました。子どもたちは、自分自身や友のからだを通して自分に合った跳び方をわかっていき、このわかりが連鎖していきながら夢中で高さに挑戦していました。

